

「権利と義務2」

～捧げる～

創世記22：1～4

■ 私達は自らの事を見失ってはいけない

自分が今どういう状況にあるのか、どういう状況に立っているのか、自分の立場は何なのかをしっかりと理解していないと、その時その時に起きる大事な出来事に気づくことができず見過ごしてしまいます。

■ アブラハムに神様がしなさいと言ったこと

創世記22章1節～4節

22:1 これらの出来事後、神はアブラハムを試練に合わせられた。神は彼に、「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、ふたりの若い者と息子イサクとをいっしょに連れて行った。彼は全焼のいけにえのためのたぎぎを割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ出かけて行った。

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに見えた。

神様がアブラハムに出したオーダーは自分を捧げるのではなく、自分にとって人生で一番大事な一人息子を自分の罪のために捧げなさいという事でした。

アブラハムも心が騒いだはずですが、「今まで私を守ってくれた神様が悪くなんかするわけない」「たとえ自分が手にかけてとしても、神様はその子を蘇らせることもできるし大丈夫だ」と神様に信頼し、神様が助けられると信じました。

■ 捧げるとは救いの完成である ～裸で生まれ裸で帰る～

私達は裸で生まれ何も持たずこの世に生まれましたのだから、自分のものではありません。自らのものを得ようとするとうつるから、捧げなければいけません。

私達は、時間でさえイエス様に贖ってもらった時間を使っているのです。

「私が守る」等と言わないでください。そんな能力はありません。しかし、守る方法はあ

ります。それは神を信頼することです。信じるとは失うことを恐れない事です。

■ 捧げたものは揺り動かされない ～塩として溶ける～

塩はたとえ水に溶けてもまた塩に戻ります。私達は人生の中でたくさんの経験をして、溶けたり、くっついたりいろいろな所で神様の愛を流す事で、良い塩になり、人々に良い影響を与える事が出来ます。

イエス様は、「私は神のあり方を捨てる事は出来ないとは考えない」と言って自分を無にしました。

しかし、イエス・キリストである神の存在を保ちながらこの地に溶けてきました。神様は、塩が溶けてまた塩に戻るように、私達を無にはしないので信じて歩みましょう。

■ イエス・キリストの友になる

捧げるということは友なんです。友というのは、その友が誰からも見捨てられようと一緒にいようと、その友が間違った道を進もうとした時に、命を徹してでもかかわろうとする者の事です。イエス様は私達の為に友として命を捨てられました。イエス様が私達にしてくれたように流していくことが捧げるという事です。

神様は私たちの人生を悪いようにするわけがありません。しかし、その中で問題と思えるようなことが起きたのなら、それは私たちにとってテストです。悪しきものが私たちに仕掛ける様々な罠を私たちの卒業のテストとして用います。そして、それを乗り越える時にもう一つ上の領域に歩みを進めることができます。あなたは神様のために一番大切な事を置くことができますか？神様以外に、あなたが神様以上に大切にってしまうものがあるなら、今それを神様に預けなくてはなりません。

(要約者:辻 総一郎)

(2018年8月12日)